

日本の実力を証明!の巻

～ロサンゼルス全米水上選手権～



日本選手権の翌年、田畑はI.O.Cに働きかけ、各競技団体の国際競技連盟への復帰を推進。FINAへの復帰を果たした。だが日本はまだG.H.O(連合国軍最高司令官総司令部)の占領下で、海外への渡航が難しい状況にあった。そんな中、田畑は内外に働きかけ、G.H.O総司令官ダグラス・マッカーサー元帥から特別に出国許可をとりつけた。こうして日本水泳チームはアメリカに渡り、ロサンゼルス全米水上選手権大会に参加。ここで日本は出場6種目中5種目で優勝。400m自由形では1位から4位、1500m自由形も1位から

episode 5

全米を驚かせた日本の圧勝 東京オリンピック招致に邁進

3位を独占。中でも、古橋廣之進は400m、800m、1500m自由形のすべてで世界新記録をマークし、「フジヤマのトビウオ」と称され一躍ヒーローとなる。全米と世界に大きな衝撃を与え、戦争で疲弊した日本国民に自信と誇りを取り戻させた。日本の復権を果たしたのだ。そして田畑は、1952年ヘルシンキ大会、1956年メルボルン大会で日本選手団の団長を務める。1940年に断念した東京オリンピック開催の夢を再び叶えるため招致活動に邁進するのであった。

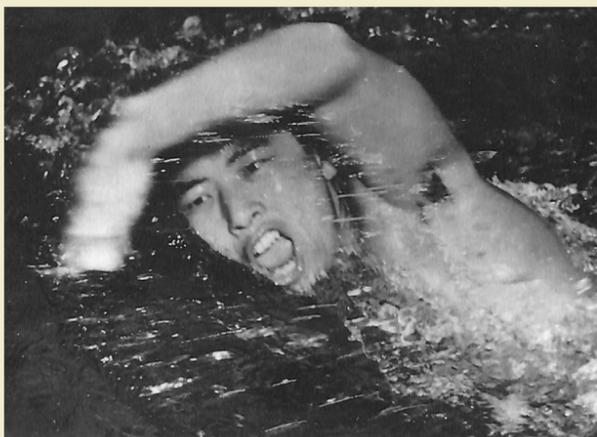
CLOSE UP!

FURUHASHI HIRONOSHIN

古橋 廣之進 (1928~2009)

世界記録を33回更新!

「フジヤマのトビウオ」と称された伝説のスイマー



浜松二中(現・浜松西高)→日本大学→日本水泳連盟第7代会長→日本オリンピック委員会第13代会長

古橋廣之進は田畑と同じ浜松出身。浜名湖に近い雄踏町(浜松市西区)で生まれており、浜名湖内のプールや遠泳で鍛えていた。古橋は将来を期待されるスイマーだったが、戦争の激化と事故による左手中指切断という悲運もあり、一時水泳を諦める。しかし終戦を迎え、ハンデは工夫で克服し、魚になるまで泳ぐと、再び水泳に打ち込み、大学対抗水泳大会や国民体育大会、学生選手権で次々と優勝。日本選手権や全米水上選手権でも、世界新記録を更新し、世界を驚かせた。そして、田畑が団長を務めるヘルシンキ大会に出場。古橋にとって初めてのオリンピック大会である。しかし長期にわたる体調不良のため8位におわり、悲願の金メダル獲得とはならなかった。引退後も、古橋の水泳に対する情熱は変わらず、日本水泳連盟会長、日本オリンピック委員会会長などを歴任し、田畑の背中を追ってスポーツ界を支えたのである。

ちよこつと豆知識

朝日新聞社役員、日本水泳連盟会長、日本オリンピック委員会会長までのぼりつめた出世人

浜松市は徳川家康公ゆかりの地として「出世の街」といわれているが、田畑政治もまた出世人である。新聞記者時代は、政治経済部長、東京本社編輯局次長、東京本社代表(取締役)までのぼりつめ、常務取締役を最後に退社。新聞社に勤めながら、仕事の合間に浜名湖に戻り、水泳指導に励んでいたため「運動部に代われ」、「1本も記事を書いたことがない」と言われたそう。しかし実際は敏腕記者として活躍し、出世していった。



田畑政治は統制力のある、厳しい指導者だった

田畑政治はロサンゼルスオリンピックに向けた合宿中、選手たちが劣等感をもたないよう、英会話どころかベッドで寝る訓練や食事のマナーまで学ばせたという。日常生活のスケジュールも管理し、徹底的に守らせた。若い選手の中には異論をもつ者もいたため、田畑自身も大好きな酒を絶つことで覚悟を見せたという。田畑は後に「統制が勝因」と自著「スポーツとともに半世紀」に記している。

1924年(大正13年)、東京帝国大学を卒業した田畑は、朝日新聞社に入社し政治部に所属。政友会の担当となり、後の首相鳩山一郎に目を掛けられ、大蔵大臣の高橋是清からオリンピック出場のための補助金を取り付けることに成功した。日本は1928年のアムステルダムオリンピックに水泳で11名の選手を派遣し、金1、銀1、銅1の成績を残した。同年、田畑はこのオリンピックで活躍した米国の有名選手を日本へ招き、国際水上大会を開催。終了後、「今後四年間の精進をすれば必ず米国を破つて世界の覇者となる事が出来る」といふ確信を得たと朝日新聞に記す。そして宣言通り1932年のロサンゼルスオリンピック、1936年のベルリンオリンピックで日本水泳チームは世界一という華々しい成果を上げた。

episode 3

次なる目標は世界一 水泳ニッポンの誕生

水泳ニッポンの名譽挽回か!?の巻



episode 4

戦争で消えた東京オリンピック 執念をもつて挑む、戦後の復活

アジア初の国際オリンピック委員会(I.O.C)委員となった嘉納治五郎や田畑の功績により、1940年の東京オリンピック開催が決定し、準備が進められていた中、日中戦争が勃発する。国内外からの反発を受け、政府はオリンピック開催権を返上。第二次世界大戦の影響

により戦時中はスポーツも軍の統制下に入った。終戦2カ月後に、これまでの日本水上競技連盟は日本水泳連盟に改称。田畑はその理事長に就任する。そして戦後初のロンドンオリンピックを目指す。国際社会から日本の出場が拒否され出場を断念することに。そんな中、奮起したのが田畑である。水泳ニッポンの実力を世界に知らしめるため、1948年ロンドンオリンピックの同日に神宮プールで日本選手権を開催。そこで古橋廣之進と橋爪四郎が1500m自由形で世界記録を上回るタイムを樹立。これは、オリンピックの金メダリストを50m以上引き離すという大差であった。日本国民は熱狂したが、国際水泳連盟FINAから除名されている中、世界新記録とは認められなかった。



1949年(昭和24年)、田畑政治はロサンゼルス全米水上選手権大会を控えた古橋廣之進選手らを、昭和天皇皇后両陛下に紹介し、激励を受けた。天皇陛下の前で水着姿のまま自己紹介するという異例中の異例の出来事である。国民を驚かせ、水泳界に注目を集めると同時に、田畑と古橋をはじめ選手たちは大きな勇気を与えられた。(天皇陛下の隣が田畑、選手は向かって左から古橋、橋爪、浜口、村山、田中)